

「令和7年産水稻の高温対策のポイント」

令和7年5月15日
埼玉県農林部

高温障害のリスク軽減には、葉色診断に基づく追肥が最も重要です。あらかじめ追肥用の肥料を準備し対策に取り組みましょう。

1 長期気象予報

気象庁が5月15日に発表した1か月予報では平均気温は60%の確率で高いと見込まれています。また、4月22日に発表された3か月予報でも5月から7月の平均気温は60%の確立で高いと見込まれています。

これらの予報から、今年の夏期も平均気温は高いと見込まれ、特に、「コシヒカリ」や「彩のきずな」などの中早生種は高温で出穂期が前進化しやすいことから、幼穂長などを参考に穂肥施用や斑点米カメムシ類の防除適期を確認することが必要です。

2 対策のポイント

(1) 土づくり

化成肥料由来の窒素に加え土壌から供給される窒素も非常に重要になります。そのため堆肥などの有機物を積極的に投入した土づくりを行いましょう。また、病害虫被害や倒伏の軽減効果、根の活性維持のためケイ酸資材も積極的に施用をしましょう。

(2) 作土深

根張りを良くして肥料の円滑な吸収を促し草勢の維持が図られるよう、耕深は15cmを目標にしましょう。

なお、耕深が浅い場合は一度に深くすると機械の運行などに支障をきたすことがあるため、年々徐々に深くするようにしましょう。

(3) 肥料

高温時の穂肥作業を回避する手段として、一発肥料（緩効性肥料）の利用があります。

一発肥料は肥効期間が長く、高温時の肥料切れによる葉色低下を招きにくいいため、栽培期間の長さに合わせた一発肥料の利用も検討しましょう。

(4) 田植時期

出穂後の登熟期間が高温環境にあると、白未熟粒などを引き起こしやすくなります。

そのため、用水などの条件が可能な範囲で田植えを遅らせ、高温を回避する方法も検討しましょう。

(5) 葉色診断に基づく中間追肥

葉色の著しい低下は、イネを消耗させ穂肥を施用しても十分な効果が期待できず、玄米の品質低下を招くので穂肥施用前に中間追肥を検討します。

「彩のかがやき（普通期栽培）」では田植後30日頃の葉色が葉色板で「4」以下の場合、窒素2kg/10a程度、「彩のきずな（早植栽培）」では田植後30～35日頃の葉色が「4～3.5」以下の場合、窒素1～2kg/10a程度を追肥しましょう。

詳しくは「彩のかがやき」や「彩のきずな」の栽培暦をご覧ください。

また、基肥＋追肥体系はもとより、高温年では一発肥料体系でも肥料切れが懸念されます。あらかじめ追肥用の肥料を準備しましょう。